

日韓両言語における「あいづち」と「フィラー」の 機能分析：「はい」と「네 (Ne)」をめぐって

崔，維卿
九州大学大学院比較社会文化学府

<https://doi.org/10.15017/25225>

出版情報：比較社会文化研究. 32, pp. 7-18, 2012-09-20. 九州大学大学院比較社会文化研究科
バージョン：
権利関係：



日韓両言語における「あいづち」と「フィラー」の機能分析

—「はい」と「네 (Ne)」をめぐって—

チェ
崔

ユ
維
キョン
卿

1. はじめに

- (1) JF: どれにしようか迷っていたんですけど.
JM: (a) はい, じゃいきますよ.
JGF: (b) はい.
- (2) KGM: (前略) 원장님 안 계시냐고
(院長先生いらっしゃらないですかと)
KM: 그렇지 바뀔줄 알고
(そうでしょうね, 変わったかと思って)
KGM: (a) 네 그러면
(はい, そう言われたら)
KM: (b) 네
(はい)
- (3) JM: 今, 何着,あの中には入ってる
JGM: 今, 百何点ほど入っておりますね～(a) はい,
もう, 今9月用と12月用の(後略)
- (4) KF: 전화 받는 것도 달라요?
(お電話の出方も違いますか?)
KGF: 그러니까요.(a) 예, 환자들한테 오는 전화는
 따로 있거든요.
(だからですよ, はい, 患者さんたちからくる
電話は別にあるんですよ)
- (5) JM: なかなか手伝いできないんですね.↓
JF: なかなかできないんですか～そお～(a) はい.
- (6) KGM: 유명하신 연예인 분들도 많이 보러 오셨고
(後略)
(有名芸能人たちもたくさんいらっしゃって)
KF: 이거 봤어요.(a) 예예.
(これ, みました. はいはい)

日本語の「はい」と韓国語の「네 (Ne)」(以下, Neと表記する)は, 上記の例 (1a) (2a) のように, その後何

らかの発話が続き「発話権」を取る場合と, 例 (1b) (2b) のように「発話権」を取らない場合の両方に出現することができ。また, 例 (3a) (4a) のように, 話し手の発話途中や, 例 (5a) (6a) のように発話末に出現することもある。メイナード (1992), 山根 (2002) はこれらのうち話し手の発話途中, 発話末及び発話冒頭に出現し「発話権」を取るものを「フィラー」「言い淀み」, 「発話権」を取らないものを「あいづち」と呼んでいる。このように先行研究では「はい」「Ne」が「あいづち」と「フィラー」に機能分化されることがあるということ是指摘されているが, 当該形式の「あいづち」としての機能と「フィラー」としての機能が比較対照されることは少なく, この観点から見た日韓両言語の対照研究は管見の限りまだない。そこで, 本稿では「あいづち」の機能を担って出現する「はい」「Ne」¹と「フィラー」の機能を担って出現する「はい」「Ne」を取り上げ, これらの形式が「あいづち」と「フィラー」として機能する場合の特徴を明らかにすると同時にその日韓両言語における異同を論じる。

2. 観 察

2.1 「あいづち」と「フィラー」の定義について

これまで「あいづち」と「フィラー」に関して様々な定義が試みられてきたが, その統一的理解はいまだ提出されていない。「あいづち」の定義についてメイナード (1992) は「話し手が発話権を行使している間に聞き手が送る短い表現で, 短い表現のうち話し手が順番をゆづったとみなされる反応を示したものはあいづちとはしない」とし, 堀口 (1997) は話し手が発話権を行使している間に, 聞き手が話し手から送られた情報を共有したことを伝える表現」としている。一方, 「フィラー」の定義について, 山根 (2002) は「それ自身命題内容を持たず, かつ他の発話と狭義の応答関係・接続関係・修飾関係にない, 発話の一部分を埋める音声現象」とし, 中村 (2007) は「同じ表現が用いられた場合でも聞き手としての発話はあいづちとし, 発話権を得た話し手の発話に現れたもののみをフィラー」としている。

本稿では、山根(2002)の定義を踏まえ「発話権」という概念を導入し、「あいづち」は「発話権を持たない聞き手が相手の話を聞いていることを示すために発する語で、応答関係を持たない発話」とする。しかし、話し手の発話に対する聞き手の否定的な気持ちや疑いを示す「否定を表す表現」と聞き手が確認のため上昇イントネーションで発話するようなものは「あいづち」としない。一方、「フィラー」は「発話権を持つ話し手が発話する実質の意味を持たず、かつ他の発話と狭義の応答関係・接続関係を持たない発話の一部分を埋めるだけの語」と定義する。上記の例で言えば、発話途中に出現する例(3a)(4a)、発話末に出現する例(5a)(6a)、さらに発話冒頭に出現し発話権を取る例(1a)(2a)は「フィラー」、発話権を取らない例(1b)と(2b)は「あいづち」ということになる。

2.2 資料、観察方法及び観察対象

本稿が観察の資料としたのは、テレビのインタビュー番組である。その理由は、インタビュー番組は、事前に打ち合わせはあるものの、ドラマのようにシナリオがあるやり取りではないという点で、日常会話に近いと思ったからである。日本語はNHKの「スタジオパークからこんにちは」、韓国語はKBSの「아침마당(atimudadan)」という男女1名ずつの司会者と1名のゲストという同じ形態からなる日韓のインタビュー番組を録画したもの、計90分である。これらの番組はどちらも女性アナウンサーと男性アナウンサーがペアで司会を務めゲストから話を聞くというものである。日本側の司会者は、男性34歳、女性42歳、韓国側の司会者は、男性42歳、女性40歳である。また、日本側のゲストは、年齢が20代から60代まで、職業は芸能人、学者、一般人であった。調査に当たっては、これらのゲストのうち世代別に20代の男性を除く男女1名ずつ計9名を選択した²。韓国側のゲストも日本側と同じく20代から60代までで、その職業も同様に、会社員、芸能人、弁護士と幅広い。調査に当たっては、これらのゲストのうち世代別に20代の男性を除く男女9名を観察した。なお、観察にあたっては、録画したインタビュー番組をゲストの性・年齢別に分類し、インタビューの最初の5分程度の会話を文字化した。

2.2.1 「応答詞」としての「はい」「Ne」と「あいづち」としての「はい」「Ne」

ここでは、「応答詞」としての「はい」「Ne」と「あいづち」としての「はい」「Ne」についての区別をする。中島(2011)は、「はい」の機能を「応答要求文」に対するものか「応答非要求文」に対するものかによって分け、「応答非要求文」に対する「はい」を「あいづち」として

いる。本研究では、中島(2011)を踏まえ、「応答詞」と「あいづち」を次のように区別する。下の例を参照されたい。

(7)JM: 着物部屋ですか↑

JGM: はい

(8)KF: 머리 끝부터 발 끝까지 얘기를 좀 먼저 해도 될까요↑

(髪から足まで、お話を先に聞いてもいいですか↑)

KGM: 예

(はい)

(9)JM: では、次です。子育てで気をつけたことは？
どうということですか？

JGM: あ、そうですね、やっぱり、まあ、金田一さんというなので、言われたりするんですね。ただ、うちの息子たちはね、あの、ハジメ君、ハジメ君って呼ばれましたから、あの、要するに、金田一探偵だというふうな形で有名

JF: はい

JM: はい

JGM: だったですよ。だから、あの、じっちゃん名にかけてってあるでしょう↑

JM: はい

(10)KF: 예, 근데, 귀도…죄송하지만 여러겔 똥으셨네요↑
(はい、ところで、耳も…申し訳ございませんが、何か所か穴をあけられたんですね↑)

KGM: 예

(はい)

例(7)の「はい」、例(8)の「Ne」は応答を要求する真偽疑問文に対して、また、例(9)の「はい」、例(10)の「Ne」は相手の発話を確認するために上昇イントネーションで発せられた疑問文に対する応答である。本稿は、例(7)から例(10)のように応答を要求する真偽質問文や上昇イントネーションで発話された疑問文に対して出現した「はい」「Ne」は「応答詞」と見なす。一方、以下の例(11)の「はい」、例(12)の「Ne」のように、相手の発話途中で発せられた応答非要求文に対するものは「あいづち」とする。

(11)JGF: 今、大人になってスペイン語の勉強してるんですけど

JF: はい

JGF: むしろ教えてほしいんですよ. 秘訣を, 語学の秘訣を

KF: 네
(はい)

(12)KF: 근데, 그 이후로도 작품 두개째
(ところで, その後も作品, 二つ目)

KM: 예
(はい)

KF: 하고 계시기 때문에 뭐 예
(やっていたらしゃるので, まあ, はい)

KM: 소개 해 주신다며?
(紹介していただくとしたら?)

(15)JM: では, さっそく, たくさんあるんですね.

JF: はい

JM: こちらからいきます.

(16)KGF: 그니까. 근데 그 종합 예술이잖아요.
(だからですね. とところで, その, 総合芸術じゃないですか)

KF: 예
(はい)

KGF: 그렇게 많은 분들이 함께
(そんなにたくさんの方たちと一緒に)

2.3 観察結果

2.3.1 「あいづち」としての「はい」「Ne」の機能とその出現頻度

ここでは, 上述した「あいづち」の「はい」「Ne」が, その機能別にどのような頻度で出現するのかを見る. 以下では, まず, 「あいづち」としての「はい」「Ne」の2つの機能, すなわち, 「理解・了解」を示す機能と「同意」を示す機能について述べ, それぞれの出現頻度³を示す. 今回の観察で「あいづち」の「はい」「Ne」と見なされたものは以下のようなものである.

(13)JGF: 今, 大人になってスペイン語の勉強してるんですけど

JF: はい

JGF: むしろ, 教えてほしいんですよ.

(14)KM: 내용을 조금 대략적으로
(内容を少し大まかに)

以上の例のうち, 例(13) (14)では, 話し手は相手の発話途中で「はい」「Ne」と「あいづち」を打ち相手の発話に対して「理解」を示しているのに対し, 例(15) (16)では, 話し手は相手の発話末で「はい」「Ne」と「あいづち」を打ち相手の確認の発話に対して「同意」を示している. 「あいづち」の機能として, 堀口 (1988) では「聞いている信号」「理解している信号」「同意の信号」「否定の信号」「感情の表出」が指摘されているが, 本稿で観察された「あいづち」の「はい」「Ne」には「理解・了解」「同意」以外の機能は認められなかったということである. 次に, この「あいづち」としての「はい」「Ne」の出現のあり方をその機能別に整理すると表1になる.

表1: 「あいづち」としての「はい」「Ne」の機能別出現のあり方

インタビュー番号	日本語インタビュー ⁴		韓国語インタビュー ⁵	
	理解・了解 ⁶	同意 ⁷	理解・了解	同意
資料 1	9/13	4/13	12/12	0/12
資料 2	6/6	0/6	16/18	2/18
資料 3	8/11	3/11	18/19	1/19
資料 4	11/14	3/14	30/38	8/38
資料 5	8/13	5/13	14/16	2/16
資料 6	5/9	4/9	25/36	11/36
資料 7	9/9	0/9	13/16	3/16
資料 8	17/19	2/19	12/15	3/15
資料 9	13/18	5/18	9/10	1/10
合計	86/112 (77%)	26/112 (23%)	149/180 (83%)	31/180 (17%)

以下、本稿の観察で確認された特徴を述べる。まず、「あいづち」としての「はい」「Ne」の総数に対する「理解・了解の表示」および「同意の表示」の頻度の割合を見ると、日本語、韓国語のどちらにおいても、「理解・了解」を示す「はい」「Ne」の頻度の方が「同意」を示す「はい」「Ne」の頻度よりも極めて高く、日本語が77%、韓国語が83%であった。しかし、この結果は相手の話に理解を示しながらその相手からさらに面白い話を引き出そうとするインタビュー番組に特有の手法に因るものとも考えられる。したがって、「あいづち」としての「はい」「Ne」の出現のあり方、すなわち、「理解・了解の表示」として出現するのか、あるいは、「同意の表示」として出現するのかを正しく判断するためにはより自然な談話における観察が不可欠であろう。次節では、この「あいづち」としての「はい」「Ne」の機能である「理解・了解の表示」、「同意の表示」を具体例と共により詳細に見ていく。

2.3.2 「あいづち」の「はい」「Ne」の機能別分析

「あいづち」として話し手の発話中に聞き手がその内容を理解・了解していることを示す「はい」「Ne」には、先に指摘した例の他に以下のようなものもある。

- (17) JF: 特に何のお味噌汁が好きですか？
JGF: え、なめこ、なめこだけじゃない。なめことお豆腐と
JF: はい
JGF: わかめといろいろですね。
- (18) KGM: 그래서 뭐 방송국 근처에 방 잡아 놓고
(それで、まあ、放送局の近くに部屋取っておいて)
KF: 네
(はい)
KGM: 피디들과 같이 얘기하고 옛날 프로그램 보고
(プロデューサーたちと一緒に話したり、昔の番組をみたり)
- (19) JM: はい、じゃいきますよ。
JGF: はい
- (20) KM: 누가 권유했습니까?
(誰か勧誘しましたか?)
KGF: 아~ 전혀 권유하거나 그러지 않았어요.
(あ~全然勧誘したり、それは、ありませんでした。)
KF: 네
(はい)

例(17)のJFの「はい」は、JGFがJFの「特に何のお味噌汁が好きですか?」という質問に対して返答をしている途中で発せられたもので、JGFのその返答を了解していることを示したものである。例(18)は韓国語の「Ne」における同様の例である。このような「理解・了解」を示す「はい」「Ne」は相手の発話途中だけでなく、例(19)のJGF「はい」、例(20)のKFの「Ne」のように、相手の発話終了後に現れることもあるが、今回の観察結果では、そのほとんどが相手の発話途中に出現したものであった。これは「あいづち」の基本的機能が、聞き手が相手の発話を「聞いていること」を伝えることにあるからだと思われる。

一方、相手の発話内容に対して「同意」を示す「あいづち」の「はい」「Ne」については、相手の「発話内容に対する同意」と相手の「言表態度に対する同意」の2種類がある。以下の例を参照されたい。

- (21) KF: 그때 활동하시던 모습을 좀 모아 봤거든요 다 기억 나시죠. *** 씨하고 또
(その時、活動なさったことをちょっと集めてみました。全部覚えていますよね。***さんとまた)
KM: 예
(はい)
KGF: 네네
(はいはい)
- (22) KM: 아~ 머느리는 사실 조금 힘들죠~
(あ~嫁さんは、事実はちょっと大変でしょう~)
KF: 네
(はい)
KM: 시댁식구가 많으면 음~
(旦那さんの実家の家族が多いとううん~)
KGM: 그렇지만요 귀여움을 받을거예요 (後略)
(そうですけど、可愛がられると思います)
- (23) JGF: 一連の動作で爪を切ったらかぐみみたいな感じ。
JM: 本当かな、これ。
JF: おかしいですね。
JM: ですね。
JGF: はい

例(21)のKMの「Ne」は、KFの「다 기억 나시죠. *** 씨하고 또 (全部覚えていますよね。***さんとまた)」というKGFに対する「確認の言表態度」に対してKMが「同意」を表したものである。これに対して例(22)のKFの「Ne」は、KMの「아~머느리는 사실 조금 힘들죠~(あ

～嫁さんは、実はちょっと大変でしょう～)」という相手の発話内容に対する「同意」を表したものである。このように今回の韓国語の「Ne」のデータには「言表態度」に対する「同意」と相手の発話内容に対する「同意」が出現したが、日本語の「はい」のデータには、例(23)のJGFの「はい」のような相手の発話内容に対する「同意」を示すものは観察されたが、「言表態度」に対する「同意」の用例は観察されなかった⁸⁾。しかし、この結果から直ちに日本語の「はい」に相手の「言表態度」に対する「同意の表示」機能がないと言うことはできないであろう。その判断のためにはより自然な談話における「はい」の観察が必要である。一方、このような「あいづち」の言表態度に対する「同意」の機能は、構成員3名以上の談話を対象としたときにより明示的に観察されるものであり、従来の先行研究の多くが準拠してきた話し手1名と聞き手1名からなる単純な会話を対象とした研究からは見逃されてきたものと思われる⁹⁾。したがって、「はい」「Ne」における「言表態度」に対する「同意の表示」機能の実態を観察するためには、構成員3名以上の自然談話を資料とし詳細に観察・分析する必要がある。

2.3.3 「フィラー」としての「はい」「Ne」の機能とその出現頻度

本項では「あいづち」と同一形式の「はい」「Ne」が「フィラー」として機能する場合を見る。以下では、まず、「フィラー」として出現した「はい」「Ne」を機能別に分類し、当該「フィラー」の総数に対する割合を算出¹⁰⁾した。「フィラー」と解釈された「はい」「Ne」は以下のようなものである。

- (24) JM: 本当かな、これ
JF: おかしいですね
JM: ですね
JGF: はい
JM: はい、では次です。

- (25) KF: 아니, 뭐, 그렇게 가운은 예전에는 미용하시는 분이 가운을 입으셨는데
(いや, まあ, だからガウンは、以前は美容をされる方が着られたんですが)
KGM: 예~예
(は～い、はい)
KF: 지금은 안 입으시지만
(今は着ないですが)
KGM: 예
(はい)

- KF: 예, 근데, 귀도...죄송하지만 여러겔 뚫으셨네요↑
(はい、ところで、耳も…申し訳ございませんが、何ヵ所か穴をあけられたんですね↑)

- (26) JGM: だから、半分切って切った面を上に向けて
JF: あ～半分でいいんだ。
JGM: はい、半分切って上に向けて塩をこうかけて

- (27) KF: 근데, 저~춤추면 좋죠. 저도 조금 배워봤는데 재밌드라고요.
(ところで、あの～踊るといいですね。私も少し習ってみましたが、面白かったですよ)
KGF: 예, 저는 춤에는 소질이 없는 줄 알았어요.
(はい、私は、踊りは素質がないと思いました)

- (28) JF: どんな感じのお父さんだったんですか?
JM: あのね、基本的に口数が少ないんですよね。僕べらべらずっとしゃべってますけど
JF: はい、はいと 言っちゃった。

- (29) KF: 네, 그럼 어떤 배우로 불리기 원하세요?
(はい、では、どんな俳優さんと呼ばれたいですか?)
KGM: 그냥 배우요.
(ただの、俳優です)
KF: 예, 그냥 배우입니다.
(はい、ただの、俳優さんです)

- (30) JM: 네, 本当に大事にされるんですね。
JGF: あの、母が取ってくれたんですけど、なかなか母も私もそうですけど、捨てられなくてものが、はい。
JF: お大事にする感じですか

- (31) KF: 계속 사양을 하셔서...진짜 모시고 싶었어요.
(ずっと断られて…本当にお招きしたかったです)
KGM: 그 시간에 얘기 방울 묶어주고 제일 바쁜 시간이라 예.
(その時間に子供の髪を結んであげたり、一番忙しい時間なので、はい)

以上の例のうち、例(24) (25)は相手の発話を受け「はい」「Ne」と発し、発話権を取って話題を変えた例、例(26) (27)は「はい」「Ne」と発し相手の発話内容に対する「同意」を示した例である。また、例(28) (29)の「はい」「Ne」は相手の

発話内容に対する話し手の「納得」を示しているのに対して、例(30) (31)の「はい」「Ne」は自分自身の発した発話内容に対して「納得」を表している。

山根 (2002) は「フィラー」の機能を「テキスト構成に関わる機能」、「話し手の情報処理能力を表出する機能」、「対人関係に関わる機能」の三つに分類し、「はい型」の「フィラー」には「テキスト構成に関わる機能」の中の「境界指示」、「対人関係に関わる機能」の中の「自分への納得」「納得の合図」の役割があると指摘している。先に見

た「フィラー」としての「はい」「Ne」をこの山根 (2002) の指摘に従い分類するならば、例(24) (25)の「はい」「Ne」は「境界指示」、例(28) (29)は「納得の合図」、例(30) (31)は「自分への納得」の役割を示したものとなる。一方、例(26) (27)において確認された「フィラー」の「はい」「Ne」の「同意」の役割は山根 (2002) では指摘されなかったものである。このような「フィラー」の「はい」「Ne」の出現のあり方をその機能別にまとめると表 2、表 3 になる。

表 2、表 3 に従い、本稿で観察された「フィラー」の

表 2 : 「フィラー」としての「はい」の機能別出現のあり方

インタビュー番号	境界指示	同意の合図	納得の合図	自分への納得
資 料 1	4 / 9	4 / 9	0 / 9	1 / 9
資 料 2	1 / 4	0 / 4	1 / 4	2 / 4
資 料 3	0 / 1	1 / 1	0 / 1	0 / 1
資 料 4	1 / 8	4 / 8	0 / 8	3 / 8
資 料 5	1 / 11	4 / 11	0 / 11	5 / 11
資 料 6	0 / 1	1 / 1	0 / 1	0 / 1
資 料 7	1 / 3	1 / 3	0 / 3	1 / 3
資 料 8	1 / 3	2 / 3	0 / 3	0 / 3
資 料 9	0 / 2	0 / 2	0 / 2	2 / 2
合 計	9 / 41 (22%)	17 / 41 (42%)	1 / 41 (2%)	14 / 41 (34%)

表 3 : 「フィラー」としての「Ne」の機能別出現割合

インタビュー番号	境界指示	同意の合図	納得の合図	自分への納得
資 料 1	0 / 2	0 / 2	0 / 2	2 / 2
資 料 2	0 / 8	4 / 8	0 / 8	4 / 8
資 料 3	2 / 10	3 / 10	0 / 10	5 / 10
資 料 4	5 / 11	2 / 11	1 / 11	3 / 11
資 料 5	1 / 4	2 / 4	0 / 4	1 / 4
資 料 6	2 / 7	3 / 7	0 / 7	2 / 7
資 料 7	3 / 11	3 / 11	0 / 11	5 / 11
資 料 8	1 / 5	0 / 5	0 / 5	4 / 5
資 料 9	0 / 0	0 / 0	0 / 0	0 / 0
合 計	14 / 58 (24%)	17 / 58 (29%)	1 / 58 (2%)	26 / 58 (45%)

特徴をまとめると、次のようになる。まず、その機能を見ると、日韓語ともに「境界指示」「同意の合図」「納得の合図」「自分への納得」が抽出された。また、「フィラー」の総出現回数に対するこれらの機能の割合については、日本語は「同意の合図」が42%、韓国語は「自分への納得」が45%と最も多く見られた。一方、日韓語双方において、相手の発話に対する「納得の合図」となる「フィラー」の出現率はそれぞれ2%程度でその他の機能と比べて極めて低い頻度を示した。以下では、この「フィラー」の「はい」「Ne」の機能について、具体例をあげながら詳細に見ていく。

2.3.4 「フィラー」の「はい」「Ne」の機能別分析

「フィラー」の「はい」には、以下の例のように、話手の発話冒頭に出現し、話題転換、発話の開始を示すものがある。山根(2002)、中島(2008)は、このような「フィラー」の「はい」の機能を、発話境界を示す「境界指示」機能と呼んでいる。

- (32) JGF: うん、イヤイヤやるんじゃないくて、楽しくやることだと思います。
JF: なるほど
JM: はい、では、もうちょっと行きましょう。
- (33) KM: 근데 워낙 그런 인사를 많이 받으셨군요.
(ところで、あまりにもそんな挨拶をたくさんされたんですね)
KF: 그러게
(そうですね)
KGM: 예
(はい)
KF: 근데
(ところで)
KGM: 예, 제가 처음에 알려지게 된 작품이 약속이란 작품인데
(はい、私が初めて知られた作品が約束という作品ですが)

例(32)は英語の勉強方法についての発話であるが、JMはJFの発話終了後、「はい」と発して発話権を取り、話題を変えている。また、例(33)では、KFが「근데(ところで)」という発話を開始した途端、KGMが「Ne」と発し、KFの発話に割り込み、発話権を取り話題を変えている。さらに、日本語の「はい」には、例(34)のように、発話を開始する合図として働くものもある¹¹。

- (34) JM: はい、理想の男性は？東京の星さんから。
JGF: はい、理想の男性は***さんと***さんです。

このような「境界指示」の機能を示す「フィラー」の「はい」「Ne」は、インタビューの司会者や会議の進行役、授業における教員といったように、ある段取り(あるいは時間的制約)に従って物事を進めていく必要のある話し手によって使用されることが多いものである。

次に、「同意の合図」となっていた「フィラー」の「はい」「Ne」を見る。以下の例を参照されたい。

- (35) JGF: そう、でも授業は基本的に全部英語です。
JF: あ、やっぱりそうなんですね。
JGF: はい、日本語の授業は日本語の授業としてありました。
- (36) KF: ***씨는 정말 아침마당에 처음 나오셨죠.
(***さんは本当にアチムマダンに初めての出演ですよ)
KGF: 예, 그러니까 아침에 우리애기
(はい、だから朝は私の子供)
KF: 예
(はい)

例(35)のJGFは、JFの「やっぱりそうなんですね」という確認の発話に対して「はい」と同意した上で、発話権を取っている。韓国語も同様で、例(36)のKGFは「(前略) 처음 나오셨죠? (初めての出演ですよ)」という確認の質問に対して「Ne」と同意を示した上で発話を続けている。また、例(37)のように、「Ne」で相手に対する「同意」を示しながら相手の発話に割り込み発話権を取得する例もみられた。先に見たように、「同意」というのは「あいづち」の「はい」「Ne」によっても示されるものであった。その意味において、この「同意」を示す「フィラー」の「はい」「Ne」と「あいづち」の「はい」「Ne」は両者の機能的連続性を示唆するものと思われる。

- (37) KGF: 기적같은 뭐 그 기록들을 막 세우고
(奇跡のようなまあ、そのいろんな記録を打ち立てて)
KF: 예, 뭐 유료 관객 점유율 3년 연속 1위 이런 얘기도 들었고 한테
(はい、まあ、有料観客占有率三年連続一位、こんなお話もお聞きしましたが)
KM: 음
(ううん)

例37のように、聞き手が「はい」と発しながら相手の発話に割り込み、発話権を奪取するといった例は日本語のデータでは確認されなかったが、韓国語のデータにおいてもその数は非常に少なかった。これは、相手の発話に割り込み発話権を取ることが聞き手であるゲストに対して丁寧さを欠いた行為となるインタビュー番組というジャンルの特徴に因るものであろう。

最後に、山根 (2002)、中島 (2008) の「納得」の用法に相当する「フィラー」の「はい」「Ne」を見る。以下を参照されたい。

- (38)(=28) JF: どんな感じのお父さんだったんですか？
 JGM: あのね、基本的に口数が少ないんですよね。
 僕ぺらぺらずっとしゃべってますけど
 JF: はい, はいと 言っちゃった。

 (39)(=29) KF: 네, 그림 어떤 배우로 불리기 원하세요?
 (はい, では, どんな俳優さんと呼ばれた
 いのですか?)
 KGM: 그냥 배우요.
 (ただの, 俳優です)
 KF: 예, 그냥 배우입니다.
 (はい, ただの, 俳優さんです)

例(38) (39)は、相手の発話内容に対する話し手の納得を示すものである。例(38)の「はい」は、JGMの「(前略) 僕ぺらぺらずっとしゃべってますけど」という発話内容に対してJFが納得したことを、また、例(39)の「Ne」も、KGMの直前の「ただの、俳優です」という発話内容に対するKFの納得を示したものである。

一方、山根 (2002:50-51) は、「フィラー」の中には「ハイ」「ウン」「ホン」「フン」のように「あいづち」と同じ形式だが、相手に対して打たれるのではなく、話し手が自分自身の発した発話内容に対して納得・確認を示す際に打たれるものがあると述べている。本稿のデータの中にも、そのような「フィラー」としての「はい」「Ne」は確認された。以下の例を見られたい。

- (40) JF: お嬢さんが描いた絵とかそういうのも捨てられない。
 JGF: もう, 捨てられないです。
 JF: だめですか？
 JGF: もう, 捨てられない, はい

 (41) KF: 근데 많은 분들이 아직도 궁금해 하시는 것이
 (ところで, 多くの方が未だに気になってい

ることが)

- KM: 음
 (ううん)
 KF: 개그맨으로 전성기를 달리고 있을 때 돌연
 그쵸, 돌연 예 개그계를 떠나셨죠.
 (ギャグマンとしての全盛期に突然, そうで
 すよね, 突然, はい, ギャグ界を離れたでし
 ょう)

例(40)ではJGFの発話末に「はい」が、例(41)ではKFの発話途中に「Ne」が現れているが、それらはどちらも話し手自身に対して発せられたものである。この2例には、話し手の自分自身の発した発話内容に対する納得・確認を示すだけではなく、自分の発話内容を相手に強調する機能もあるように思われる。石川 (2010: 67) は、「情報提供」の発話末に出現する「はい」は、相手に対して「念押し」の機能を持っていると指摘しているが、それはこの分析結果にも当てはまる。このことから、発話末だけではなく発話途中に現れる「はい」「Ne」も自分の発話内容に対する納得のみならず、相手に対するその強調を示す機能も持つと考える。

3. 結 論

本稿では「あいづち」あるいは「フィラー」として出現する「はい」「Ne」の機能の異同について分析した。その結果は、次のようにまとめられる。

本稿が収集したデータに出現した当該形式の機能を分類した結果、「あいづち」としての「はい」「Ne」には、日韓両言語ともに「相手の発話内容に対する理解・了解の表示」「相手の発話内容に対する同意の表示」という機能が認められた。これらの機能の頻度については、日本語、韓国語のどちらにおいても「理解・了解」を示す「はい」「Ne」の頻度の方が「同意」を示す「はい」「Ne」の頻度より、極めて高かった。また、「フィラー」の「はい」「Ne」については、日韓語双方において「境界指示」「同意の合図」「納得の合図」「自分への納得」という機能が観察された。これらの機能の使用頻度をみると、日本語は「同意の合図」、韓国語は「自分への納得」を示す頻度が一番高く、「納得の合図」については、日韓語双方とも、極めて低い頻度を示した。しかし、今回のデータでは、「発話開始」という意味での「境界指示」の機能は日本語の「はい」にしか確認されなかった。韓国語の「発話開始」という意味での「境界指示」の機能の存在の有無については、今後の課題として、より、多様なデータを収集し、考察していきたい。

次に、「あいづち」の「はい」「Ne」と「フィラー」の「はい」

「Ne」の機能の異同については、相手の発話内容に対する「同意の表示」機能が「あいづち」「フィラー」の両方に認められた。このことを本稿が提示した「あいづち」と「フィラー」の定義に即して考えるならば、「フィラー」の「はい」「Ne」は、話し手が聞き手の発話内容に「同意」を示しつつ、それに乗じて聞き手から発話権を奪取するための戦略のひとつと考えられる。話し手がこのような戦略を取るのには、同意を示す「はい」「Ne」を用いることによって「同意」という相手に対する配慮行為が示され、発話権の奪取という相手にとって脅威になる行為が緩和されるからであろう。なお、「フィラー」の「はい」「Ne」が話し手自身の発話内容に対して発せられると、それは自身の発話内容に対する納得・確認を示すことになる。一方、「フィラー」の「はい」「Ne」の「境界指示」機能は「あいづち」の「はい」「Ne」のどの機能とも結びつきにくい。この「フィラー」の「境界指示」をどう解釈するかが今後の課題である。

【注】

1. 韓国語の「네(Ne)」と「예(Ye)」は同じ意味を持つ「はい」形であるため、本稿では両方の形式を同じものとして扱い、「Ne」と表記する。
2. 今回のデータ収集では、日韓の20代の男性のデータが取れなかったため、20代の男性についての分析は行われなかった。
3. 「あいづち」の頻度の算出に当たっては、「あ、はい」、「아(a), 네(Ne)」のように、異なった「あいづち」が連鎖する場合は、2つの「あいづち」として数えた。また、「はいはい」「네(Ne), 네(Ne)」のように同じ字が続く場合は一つとして数えた。
4. 日本語の司会者の年齢・性：(JF:40代・女), (JM:30代・男)
日本語ゲストの年齢・性・職業：
資料1 (JGF:20代・女・俳優), 資料2 (JGM:30代・男・俳優), 資料3 (JGF:30代・女・俳優), 資料4 (JGM:40代・男・俳優), 資料5 (JGF:40代・女・俳優), 資料6 (JGM:50代・男・言語学者, 評論家), 資料7 (JGF:50代・女・歌手, アーティスト), 資料8 (JGM:60代・男・小説家, 作家), 資料9 (JGF:60代・女・歌手, アーティスト)
5. 韓国語の司会者の年齢・性：(KF:40代・女), (KM:40代・男)
韓国語ゲストの年齢・性・職業：
資料1 (KGF:20代・女・世界ボクシングチャンピオン), 資料2 (KGM:30代・男・ミュージカル演出家, 芸人), 資料3 (KGF:30代・女・俳優), 資料4

(KGM:40代・男・俳優), 資料5 (KGF:40代・女・ベンチャー企業社長), 資料6 (KGM:50代・男・医学博士, 美容師), 資料7 (KGF:50代・女・大学教授), 資料8 (KGM:60代・男・アーティスト, 俳優), 資料9 (KGF:60代・女・家庭法律相談所長)

6. この数字は「あいづち」の「はい」の総数に対する「理解・了解」を示す「はい」の数を示したものである。韓国語についても同様。
7. この数字は「あいづち」の「はい」の総数に対する「同意」を示す「はい」の数を示したものである。韓国語についても同様。
8. 今回の「あいづち」の「はい」のデータには「言表態度」に対する「同意」を示すものは確認されなかったが、「あいづち」の形式の中には、次の例のように「言表態度」に対する「同意」を示すものがあった。

JM: では、次です。笑顔がステキ！怒ることはありますか

JF: そうそう、そうそう

JGM: う～ん、あまり最近怒らない(後略)(崔 2008:44-45)

9. このことは話し手、聞き手2名からなる談話において相手の「言表態度」に対する「同意の表示」を示す「あいづち」が出現しないことを意味しない。例えば、次の例のように、構成員2名の談話においても相手の「言表態度」に対する「同意」を示す「あいづち」は出現可能である。

A: 彼って怒ることあるのかな。

B: そうそう。

10. 「あいづち」と同様に「フィラー」の数は「はい、わあ～」のように、記述した形式が1字でも違えば、異なった「フィラー」として扱い、2つの「フィラー」として数えた。また、「はいはい」のように同じ字が続く場合は一つとして数えた。
11. 例34の日本語のデータは、資料とした番組の中で、ゲストに対して聴衆者から寄せられた質問を紹介する場面で取られたものである。今回の韓国語のデータの中に例34のような発話開始の合図として機能する「Ne」が確認されなかったのは、韓国語の資料となったインタビュー番組の中に日本語の番組に見られるようなコーナーが設けられていなかったことに因る可能性がある。

【参考文献】

- 崔 維卿 (2008)「日韓スタイルにおける「あいづち」の基礎的研究」未刊行修士論文

- 堀口純子(1988)『日本語教育と会話分析』くろしお出版
- 石川 創(2010)「あいづちとの比較によるフィラーの機能分析」『早稲田日本語研究』19, pp.61-73.
- メイナード、K. 泉子(1987)「日米会話におけるあいづち表現」『月刊言語』第16巻, pp88-92. 第11号大修館書店
- (1992)『会話分析』くろしお出版
- 中島悦子(2000)「あいづちに使用される「はい」と「うん」－あらたまり度・待遇度からみた出現実態－」『ことば』21, pp.104-113. 現代日本語研究会
- (2008)「自然談話に現れるフィラー－自然談話録音資料に基づいて」『アジア・日本稿センター紀要』4, pp.1-23.
- (2011)『自然談話の文化－疑問表現・応答詞・あいづち・フィラー・無助詞－』おうふう出版
- 中村香代子(2007)「日本語の感謝表現と共に用いられるフィラーについて－自由記述式談話完成テストの回答分析から－」『語学教育研究論叢』第24号, pp.149-168.
- 大浜るい子(2006)『日本語会話におけるターン交替と相づちに関する研究』溪水社出版
- 富樫純一(2002)「「はい」と「うん」の関係をめぐって」定延利之編『「うん」と「そう」の言語学』pp.127-157. ひつじ書房
- 山元一晃(2008)「教室談話における教師の「ハイ」の機能－話題の完成という観点から－」『筑波応用言語研究』15, pp.127-138.
- 山根智恵(2002)『日本語の談話におけるフィラー』くろしお出版

Analysis of the Functions of Backchannels and Fillers in Japanese and Korean – with Focus on Japanese “Hai” and Korean “Ne” –

Yukyung CHOI

This paper analyzes the functions of the Japanese “Hai” and the Korean “Ne” used both as backchannels and as fillers. The findings are as follows: (i) the “Hai” and the “Ne” used as backchannels function as markers expressing both the listener’s “understanding/accepting” of the speaker’s utterance and the listener’s “agreeing” with the speaker’s utterance, while the “Hai” and the “Ne” used as fillers share the functions that express “discursive border”, “listener’s agreement with the speaker’s utterance”, “listener’s understanding of the speaker’s utterance” and “speaker’s understanding of her own utterance”, (ii) the “Hai” used as filler has a function of expressing the beginning of an utterance, but the “Ne” used as filler does not have such a function. From above, it is recognized that the “Hai” and the “Ne” used as both backchannels and fillers share the function of expressing an “agreement”. This “agreement” is divided into two classes. When used as backchannels, they express the “listener’s” agreement with the spoken content, while when used as fillers, they can also express the “speaker’s” agreement with her own utterance. On the other hand, their function of expressing “discursive border” does not relate to any of the functions of them being used as backchannels.

Key words : Conversation Analysis, Backchannel, filler, functions, floor.